
Cruel Game

優輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cruel Game

【Nコード】

N0878B

【作者名】

優輝

【あらすじ】

クリアすれば願いが叶い、できなければ一生現実世界に戻る事は叶わない。『何を犠牲にしても願いをかなえよう』そう誓った蒼は、異空間で行われているそのゲームに参加する事になる。

プロローグ

ようこそ、私達のゲームへ。

クリアすれば願いが叶い、
現実に戻る事ができます。

死ねばゲームオーバー。

二度と現実に戻る事はできません。

もちろんクリアできなければ、

一生現実世界に戻る事はできませんのでご了承ください。

さて、

それでもゲームに参加しますか？

第1話：蒼色の願い

願いを叶えたかった。たとえば、罪を犯すことになっても、

あの人だけは、幸せになつてほしかった。

荒野に、一人の少年がたたずんでいた。あたりは暗く、その容貌ははつきりとしなない。

「自由の指輪よ、選民へ下れ」

その少年が呟くと、少年の周りが唐突に明るくなった。いくつもの強い光が、あたりを照らした。それによって、少年とその周りの状況が見える。

16ぐらいの黒目黒髪の少年だった。しかし、その顔に歳相応の表情は全く見られない。それなりに整っている顔は、淡々としていて冷え切っていた。その無機質な顔の中で、暗い闇色の瞳が唯一、強い覚悟の光を放っている。

「五個か……。気が遠くなるな」

特に表情を変えないまま、手を招き寄せるように動かすと、あたりを漂っていた強い光が少年の手へと集まる。その光は指輪だった。1つ1つ、全く同じ指輪は無かったが、不思議な事に全てが同じ物のように見えた。指輪が少年の手に収まる度に光が消えていき、辺

りが再び暗くなる。

少年は、あたりを見渡した。光の無くなった世界は暗い。しかし、闇になれた少年の眼は、自らの作り出した惨状がはつきりと見えた。

少年の周りには、ただのモノとかした人々が転がっていた。

その全てが、手ひどく痛めつけられ、自然死でないことを証明している。中には、本来の形すら残していない物さえあった。

「気性の荒い人たちだ。別にこんな姿になるまで戦わなくてもいいのに……」

自分が仕組んだことだというのに、少年は他人事のように言った。そして、少年は冥福を祈る事さえせず、その場を離れる。

残されたモノたちは、夜の深い闇に静かに飲み込まれていった。

次の日の朝、少年とモノのいた荒野には何も無くなっていた。昨晩、惨状があったことなど誰も思わないほどに、何も無くなっていた。

だから祈ったんだ。自分の全てを捨てて。

。神様でも悪魔でもなく、自らをゲームマスターと名乗る道化に

第2話：商業の街ティカッタ

商業の街ティカッタ。

首都ばかりが栄え、その他の街が過疎化しているアーラズ国。その中で、珍しく都市以外で栄える街として有名なのが、このティカッタであった。昔から交通の要所として栄えてきたこの街は、それ以外の便利な交通路が確保されてなお、多くの商人や物資の集まる大陸屈指の商業場である。

「さーすがあ。その二つ名に恥じない騒々しさだねえ」

そう呟いたのは黒目黒髪の少年だった。あたりをキョロキョロと見回す仕草と表情は、歳相応以上の純粹さと明るさを感じられる。一言で言えば、幼い雰囲気少年だった。

それ故に、少年の着る黒一色の動きやすさだけを重視したコートが浮いている。

全く似合っていないその服装は、無駄に自分の存在を主張するためのようにさえ見えた。

「その兄ちゃん。シープはいかが？」

突然の呼びかけに少年は後ろを振り返る。そこには気のよさそうな中年男性が、あまい香りを放つ果物を持っていた。少年は果物というより食べ物として問題がありそうな、奇妙すぎる形に興味を惹かれたのか、好奇心溢れた瞳でしげしげと見つめる。

「それ、シープっていうの？」

「ああ。ティカッタ周辺でしか取れない果物だよ」

「いくら？」

「二十メルだが、おまけして十五メルにしてやるう」
「本当！？ じゃあ、買っちゃおうかなー」

そう言つて、蒼は嬉しそうに店主に近寄つた。その笑顔や弾んだ声色、楽しい足取りなど、蒼の行動一つ一つが、自然に他人を明るくさせる。周りにいる人びとは微笑ましく笑い、中年男性は思わず顔をほころばた。そして、シープを二つ渡す。

「えっ？ 僕、一つ分の値段しか……」

「いやいや。一つはおまけさ。貰ってくれ」

「わあ！ ありがとう！！」

少年は再び最高の笑顔を向けると、嬉しげに二つのシープを持って駆けていった。

「いやあ、いい子だったなあ。見慣れない顔だったが……」

何処の子だったのだろうと考えて、店主は唐突にある可能性が浮かんだ。

見慣れない顔に、この世界の人間としては珍しい黒目と黒髪。羽織っていた黒のコートは、一般人が着る物としては異質だ。

「いや、でもまさか『旅人』ではないよなあ」

この世界での『旅人』。それは、異世界より何らか目的でこの世界にやってきた殺戮者と言われていた。

基本的には『旅人』。どうして殺し合いをしているようだが、時折一般人も巻き込まれて殺される。それ故に、ほとんどの一般人には嫌悪されている『旅人』だが、何故か捕まえられたことは一度もな

い。というより、どの国の法律においても彼らを裁くことができないのだ。何故かは知らないが。

店主は暫く考え、しかしやはり「旅人」ではないと思った。あの子供は、どうみたって普通の少年だ。「旅人」は総じて、みな陰気で暗い雰囲気のある者が多い。なにより、見ているこっちが幸せになれるような笑顔を持つあの子が、人を殺せるとは思えない。

そう思って再び商売に精を出しはじめた店主は、その少年を静かに追う男たちに気づかなかった。

その男達は、黒い服に陰気で暗い雰囲気をまとっていた。

黒目黒髪の少年、蒼は、シープと呼ばれる果物をかじった。果汁が飛ぶと共に、口の中に甘味と酸味が広がる。匂いからしつこいぐらい甘いのではないかと思ったが、酸味と甘味が丁度良く合わさっていて後味も良かった。1つ欠点を上げるとするならば、とても食べにくい形だということだけだ。

「うーん、個人的にリンゴやイチゴより美味しいかも」

蒼はシープを食べながら、人ごみの中を縫うように歩く。人が多く歩いているにも関わらず、何故か誰ともぶつかる事はない。違和感を抱かなければならないはずの現象だったが、道行く人は誰も気づかなかった。

ふと、背後に常人ではない人間の気配を感じた。観察していると、いつには、あまりにも殺気がこめられすぎている視線といい、静か過ぎる足音といい、誘っているとしたか思えない。

「意外と早く見つかった」

蒼はクスリと笑うと、突然立ち止まり手に持っていたもう一つのシープを道の脇にいる野良猫の前に置いた。持っているときつと潰してしまうし邪魔になる。

顔を上げれば、ガラス越しに綺麗な鏡があつた。それに向かつて、蒼は笑う。それはシープをオマケしてくれた中年男性に向けた笑顔と全く同じ、自然と人を明るくさせる笑顔だつた。違和感を抱くほど全く同じ笑顔が、それは作り笑いなのだと感じさせる。

「大丈夫。僕は笑える。まだ笑える」

呪文の様にそう唱えると、蒼は鏡から眼を離し、再び歩き出した。歳相応以上の楽しげな雰囲気纏い、自然と人を明るくさせる笑顔のまま……。

時を同じくして、ティカツタにもう一人の少年の『旅人』がいた。蒼も随分若い、その少年はそれより若く十三か十四ぐらいだつた。藍色の髪に、深い青空のような綺麗な瞳をしている。しかし、その表情は蒼と真逆で、酷く不機嫌かつ三白眼だつた。

（選民の星は消えていない。その代わりに自由民の星が、ここ周辺で消失を見せている……か）

少年、ウエルは歩きながらここ最近の夜空を、正確にはそこに輝く星を思い出していた。この世界に広がる星は、全て『旅人』を現す。その街に広がる星を見れば、その街にどの『旅人』がいるのかわかるのだ。もちろん全ての『旅人』がわかるわけではなく、自然

に愛され自然を愛する『自由民』だけだが。

(これが意味すること……それは、選民が自由民の指輪を集めてるということ)

ウエルは首にかけられた自らの指輪を、手でつよく握った。手を開くと、そこにはすでに指輪が無く、指輪をぶら下げていた紐だけが残っている。

「俺は絶対に奪われない……！」

ウエルはそう呟くと、歩き出す。行き先はティカッタ第三歩道。ティカッタの大通りだった。

二人の少年はまだ知らない。

蒼と藍の出会い。それが、どれほど多くの運命を揺るがすかということを。

第3話：蒼と藍の出会い

選民、自由民、国民。

選民は、選ばれし民。宿命を負う者。ゆえに自由を欲す。

自由民は、自由の民。孤独を生きる者。ゆえに居場所を欲す。

国民は、国に仕えし民。縛られ、王に忠誠を誓う者。ゆえに自由と選ばれし生贄を欲す。

呪われた盟約。システム

血塗られた物語。ゲーム

足りない物、欲しい物。

全て手に入れて、完全になりなさい。

完全こそ、神に出会う権利があるのだから。ゲームマスター

「うーん。ちょっと迂闊だったかなあ」

蒼は走りながら、ため息をついた。人ごみを縫うように走っているにも関わらず、その速度は常人離れしている。しかも、顔には汗一つ浮かんでいない。

「まさか、街中で襲ってくるなんて」

蒼は追われていた。昨晚のことを思い出す。

自分が直接を手を下したわけではないため、死体と指輪の数があるか確かめる事ができなかったのだが（何せ原型を留めていない死体が多すぎた）、どうやら自由民の他に国民もいたらしい。まさか、国民と自由民が組んでいたとは……。

「どうしよっかなあ。国民殺しても意味ないしなあ」

選民は宿命を負い、故に自由を欲す。これはゲームを始めるときにゲームマスターから教えられる、ゲームクリアのヒントだった。

この世界のゲーム参加者は、全員「選民」「自由民」「国民」にわかれている。

それぞれ独特の能力があり、人数も違う。そして、ゲームをクリアするにはそれぞれ自分の所属する民以外の犠牲が必要なのだ。

蒼は、最少クラスの「選民」。選民は自由を欲す。つまり、「自由民」の犠牲、指輪が必要なのだ。だから、蒼は昨晚自由民を殺した。

それだけだったら、別に問題はなかったはずなのだが……。

「選民だってバレルのはヤバイよねえ」

どんな経路で伝わったのかは明確には分からない。おそらくは、自由民に殺し合いをさせるために策を仕組んでいる間、国民と接触したときだと思うのだが。やはり、むやみやたらに『旅人』と接触するのは避けたほうがいいのかもれない。

「はあ。ちゃんと確かめればよかったか……」

現在、3人ぐらいの国民に追われていた。ティカツタに居る場合、ティカツタに潜伏する国民の方が、蒼より有利だ。国に仕える国民は、それなりの恩恵がある。反対に、選民は国に追われることはあ

つても、迎えられることはない。それは、この世界のルール^{ゲーム}だった。よって、振り切るか、ティカッタの外に出るかしないと勝ち目がない。

しかし、この人ごみの多い中央通では、振り切るほどスピードを上げる事もできないし、外に逃げるにも少し門が遠すぎる。

「どうしよっかなー」

蒼は走りながら、この危機を脱出する方法を考えた。

中央通りは、人ごみがすごかった。

(入りたくない……)

ウエルは人ごみが苦手だった。肩がぶつかるし、小柄な自分の体は、下手をすると弾き飛ばされるからだ。それに、ウエルの特殊能力は人ごみだと使いにくい。しかし、ここまで来た手前、何もしないで帰るといのはちよっと嫌だった。

(仕方ないか)

覚悟を決めて人ごみに入る。人々の熱気が非常に疎ましかった。

「どいっ、どいてー！」

ふと、焦った声が聞こえた。ボーイソプラノのような高い声ではないが、変声期を終えたにしては随分と高めの声だった。

人ごみがわれ、そこから常識はずれな速さで走る、少年が飛び出してきた。切羽詰ったような顔であたりを見回している。あまり見慣れない黒目黒髪と、幼い雰囲気とは反対に油断なくあたりを見回す様子は、どこか常人じゃない雰囲気だった。

(あいつ、まさか……)

可能性を考え、そこから立ち去ろうとする。旅人なら、無差別に襲ってくる可能性がある。ここで戦うのは勘弁して欲しかった。幸い、少年は自分が旅人だということには知らない。

しかし、何故か少年は自分の姿を見つけると迷わずこちらに全力疾走してきた。思わず逃走する。

「ちよっ！　ちよつと待って！」

その行動は予想外だったのか、少年は慌てた様子で追っかけてきた。旅人だと気づいたのか、単純に一般人だち思って接してきたかは分からないが、どの道接触すべきではない。

こちらとしては、無駄に戦いたくないし、何より人ごみの多い街で戦うのは苦手だ。相手の意図が分からない以上、捕まるわけにはいかなかった。

果たして、旅人達による傍迷惑な逃走劇が始まるのだった。

第4話：追いかけて

何やってんだろ……。

流石に、そう思わずにはいらなかった。

「……………」

目の前を走るのは、藍色の髪をした少年だ。現在、逃げられている。

「待て！」

後ろを走るのは、30代ぐらいの男達だ。よくまあ、追いつけるな。

「本当に何やってんだろ……………」

蒼はため息をつく。仮にも殺戮者と呼ばれる旅人なのに…………、と思わざるを得なかった。

追いかけてこ（と、蒼は思えてならなかった）を始めてから、これこれ30分以上が経った。前方二組は人の間を縫うように走っているからそんなに目立ってはいないが、蒼を追っている国民は、国民の権利を存分に発揮し、周りの迷惑を考えずに走っているため、非常に目立つ。

「うざいなあ。どうにかして、あの子に追いつければいいんだけど

……」

蒼は自分の少し前方を走る少年を軽く睨んだ。指輪を持っているように見えないが、あの少年は間違いなく旅人だ。選民たる蒼には周囲にいる旅人を見つける能力があった。逃げているとき、近くに国民達とは違う旅人の気配を察知し、近づいてきたのだ。あの少年を利用すれば、逃げることができそうなのだが……。

だが、意外にもあの少年、足が速い。こういう場所を走ることに慣れているのかもしれない。

（はあ。仕方ないか……）

できればやりたくなかったなあ、と思いながら蒼は斜め前に眼を向けた。そこにあるのは、シープなる食べ物くれた店。いつの間にやら一周してしまっただらしい。

悪いことだとは分かっていたが、申し訳ないとは全く思わなかった。

「うわあ！」

「っ!？」

ウエルの横から、突然男が飛び掛ってきた。気よさそうな中年男性で、服には甘い果物の匂いがついていていた。

ぎりぎりでは何とか避け、そのまま足で腹を蹴飛ばす。すると、その男は造作もなく吹っ飛ばされた。痛がる中年男性は、ウエルを見て怯えていた。ウエルとしては、何故いきなり襲いかかられたのか分からなかった。

「つつかまーえたっ
」
「いつ」

突然後ろから、ハイテンションな声が聞こえた。間違いなく、自分を追っている少年の声だ。中年男性に気を取られているうちに、追いつかれたらしい。逃げ出そうとするが、相手は肩をがっちりと押さえて放そうとはしなかった。

「放せっ」

「つれないなあ。話かけようとしただけなのに」

にこにこ笑う少年は、普通に見れば人を和ませる。しかし、今はバツクから不穏なオーラが放たれているような気がしてならない。

「いやあ、逃げるのを手伝って欲しいだけだっ」

「俺には関係ない！」

「いやいや。それはもう無理だと思うよ？」

そう言っ、少年は笑いながら人ごみをさした。さっきの騒動のせいで、俺達と中年男性を取り囲むかのように野次馬ができている。そして、それに割り込むように、三人の男が入ってきた。どうやら、少年はこいつらに追われていたらしい。街で仕掛けてきたということは、国民だろう。

国民が必要とするのは、選民の生贄。そして自由民の指輪だ。

「君、街中で僕から逃げるってことは選民か自由民でしょ」

「……」

「協力してくれるよね？」

そう言っ、少年はウィンクして笑った。自然と他人を明るくさ

せるような笑顔が、酷く憎らしく感じた。

第5話：狂宴

周りには野次馬。目の前には3人の国民。隣にはむかつく旅人（おそらく選民）。

状況は最悪。

「さあて、派手にやりますかあ！」

「結局、俺はどうすればいいんだよ……」

「僕が後ろから援護してあげるから、肉弾戦で」

「お前……」

派手にやると言ったくせに援護に回るらしい少年に、ウエルは怒りを覚えた。何故巻き込まれただけなのに、そんな危ない仕事をしなければならぬ。派手にやることになるのは自分ではないか。

「僕、肉弾戦苦手なんだよね」

「……俺も苦手だが」

「さっきの蹴りはすごかったよ。その調子でGO！」

「……」

少年はニツコリ笑って、右手の拳を上突き上げた。それを見ると、なんかどうでもよくなってくる。

どの道、戦わなければならないことに違いはないわけだし……。

こちらの話が一段落したのを悟ったのか、国民の一人が片手剣を引き抜いた。今まで見たことの無い種類の武器だった。他の2人は、武器を構えてはいるが襲ってくる気配がない。

「あ、刀だ」

「カタナ……？」

「あー、そつか。君は地球人じゃないから、刀を知らないのね」

少年は、どうやらあの国民の武器を知っているらしい。おそらく、あの国民と少年の生まれた世界が同じなのだろう。違う世界で生まれたウエルは、当然、知らないはずだ。

「その、カタナとかいう武器の特徴は？」

「さあ？ あんまり知らない。とりあえず、片刃で、たくさんは切れないけれど切れ味は抜群ってことぐらいじゃない？」
「なるほど……」

ならば、一対一で最も効力を発揮するのだろう。

(出し惜しみしてる場合じゃないか……)

ウエルはコートの中からナイフを取り出した。それを右手の指の間にそれぞれ持つ。片手にしか持たないので、合計4本。もちろん、ナイフ自体に特殊効果はないので、真つ向勝負では剣には適うはずもない。

相手が来るより先に、ウエルは走り出した。その足の速さに、国民はもちろんウエル自身も驚く。体が羽のように軽いなどということはないが、すごく速く足が動いた。

しかし、速くなった理由など考えている暇はない。

一気に距離を詰め、四本のナイフを投げつける。国民が素早く剣を振った。ナイフは造作もなく弾かれるが、予想通り。何の問題も無い。

ウエルは後ろに引かず、そのまま国民の懐に入った。引くと予想していたのだろう。国民がカタナを戻すのが一瞬遅れた。

その隙にウエルは、まるでナイフでも持つかのような手つきで国民に右手を突き刺す。国民は奇妙な表情をした。殴るにしている、手

の構えがおかしかったからだろ。その拳が当たらないギリギリの位置で飛びずさるうとする国民に、ウエルは内心で笑みを浮かべた。ひっかかった……！

次の瞬間、ウエルの手にはナイフが握られていた。

国民は驚愕した。しかもすでに退避しかけていたため、突然伸びたりーチに対応しきれない。それでも、無理矢理身体を捻り致命傷を避ける。腹部をかすったナイフに、ウエルは小さく舌打ちをした。やはり、避けられたか……。

国民はナイフが掠った一瞬後に一気に距離をとり、剣を構えなおす。腹部に、血が滲んでいたが、国民は傷を気にした様子はない。ウエルを睨みつけ、攻撃に出ようとする。

「ぐあっ」

「ぐふ……」

しかし、国民は後ろから聞こえてきた二人分の国民の声に動きを止めた。スキを見せないようにしながら、振り返る。

そこには、それぞれ二本ずつ、腹部や心臓付近に刺さっていた。即死はしないだろうが、いずれも致命傷だ。ウエルとしては首や頭を狙おうかとも思ったのだが、動きやすいうえに最悪はずす場合がある。外れてもとりあえず刺さるだろうということで、心臓やら腹を狙ったのだ。

「うわお。カッコいい」

後ろから緊張感のない声が響いた。どうやら、少年は何故2人の国民にナイフが刺さったのか分かったらしい。

「何？ もう1人の仕業か」

「僕ナイフなんて持ってませーん」

「しかし、こいつに二人にナイフを差す間なんて無かったはず……」

残った国民は、眉間に皺をよせてウエルを睨みつける。それに対し、ウエルは特に表情を変えず、止めを刺すために新しいナイフを取り出した。国民の顔にわずかに焦りが浮かんだ。一人は今のところ傍観しているが、いつ参戦するとも限らない。二対一はきついのだろう。ウエルはナイフを構え踏み込もうとする。

「君！ もういいよ」

「は？」

だが、それは呑気な声によって止められた。従ってやる必要もないが、思わず振り返ってしまう。

少年は、呑気な声と同じぐらい呑気な顔で笑っていた。

「ここまでやれば、もういいよ」

「止めを刺さなければ、後々面倒だ」

このゲームにおいて、甘さは命取りになる。それに、国民はウエルのターゲットでもあるのだ。生かすことに意味などない。

「いや、そういうわけじゃなくて。君は、あと見ても大丈夫ってこと」

「はっ」

「ここまで弱った相手なら、操りやすいしね」

少年は笑いながらそう言った。そうして、右手すつと上にあげる。

「くっ」

「いってえ」

「ひい！」

ナイフの刺さったままの国民2人と、最初に襲ってきた中年男性が立ち上がった。その顔は苦悶や恐怖に染まっており、どうみても自分の意思で立ち上がった様子ではない。

「本当は3人も操るのは骨が折れるんだけどねえ。まっ、仕方ないか」

そう少年が言うと、三人が国民に襲い掛かる。国民2人は自分に刺さったナイフを手に取り、中年男性は店にあったナイフを手に持っていた。

そして三人が国民に襲い掛かる。どうやら、少年が三人の身体を操っているらしかった。

旅人には、総じて個人個人の特殊能力を与えられる。少年の能力はそれなのかと思っただが、それにしては随分と攻撃がお粗末だ。

動きは遅く、攻撃自体も単調。三人もいるというのに、連携させる気がないのか出来ないのかはわからないが、ただ一斉に襲ってくるだけ。これなら、殺さずとも撃退する事ができる。国民も、突然操られた仲間に襲われ、驚きはしていたものの、すぐに冷静を取り戻し、峰打ちで撃退した。

しかし、その行動をむしろ少年は喜ぶように笑った。あまりに場違いな笑みに、ゾクリと悪寒が走る。

「そっかあ。やっぱり仲間をいきなり殺すなんて、できないよねえ」

そう言って、少年は笑顔のまま指を動かす。すると、峰打ちで気絶させられたはずの三人がむくりと起き上がった。その表情は苦痛と恐怖に歪んでいる。しかし、少年はそんなもの関係ないとばかりに、襲い掛かせた。

襲いくる仲間達に、国民は様々な手をうつた。意識がなくても動かせるというのならば、肉体的に動かさなくしようと足の腱を切ったりもしていたが、意味はなかった。再び血だらけの姿で襲ってくる。

決して強くない。むしろ弱い相手だが、終わりの見えない戦いを強いられ続けるのは、どれほどきついだろう。ただでさえ、国民はウエルに腹部を切られているのだ。

ウエルは、目だけ動かして少年を見てみて……見たことを後悔した。

少年は、酷く楽しそうに笑っていた。とてもではないが、この狂宴を作り出した本人とは思えない。

その場が、異様な空気に包まれる。

「おい。いつまでこんな……」

この場の空気は耐えがたかった。それに、時間の無駄だ。自分がやれば、一瞬で終わらせる事ができる。相手にさほど苦痛を与えず、殺せる。

しかし、少年は言葉を途中で遮った。口到人差し指をあてる。その顔は相変わらず本当に楽しそうで、思わず言葉を失った。

少年の笑顔は、きつと本物ではない。他の人間には、きつと気の狂った子供に見えただろう。けれどウエルには分かった。彼は、別にこの情景が楽しいわけでは無い。情景を楽しんでいるわりには、その少年の笑顔はあまりに変化がなさ過ぎる。最初に自分に片目をつぶって見せたときの笑顔と全く同じなんてことは、わざとでも無い限りありえない。

偽りの笑顔が必要なときもあるだろう。

しかし、何故この場面で笑わなければならない？

偽りの笑顔に意味など無いはずなのに。

それでも、少年は誰が見ても楽しそうだと思わせるような笑顔で笑っていた。

3人が何度目かもわからない攻撃を仕掛けた。しかし、今までとは動きが違う。国民二人がゆっくりと動き、中年男性のみがいつも通り飛び出す。

普通なら、警戒すべき動きだった。しかし、精神が疲労した国民はその微妙な動きの変化に気づかない。

1人飛び出していった中年男性が、切りかかろうとして途中で動きを止めた。そのまま、国民に枝垂れかかるかのように倒れる。国民は、突然の行動に避けることもできず、思わずカタナを深々と中年男性の腹に突き刺した。全体重でのしかかっていたせいか、カタナがそう簡単にぬけないほど深く刺さっていた。

そして、それを見計らったかのように、残りの2人が襲ってきた。さっきまでのだらだらした動きとは違い、俊敏な動きで。

国民の傍にある武器は、中年男性がもっていたナイフだけ。カタナになれた国民の様子を見る限り、ナイフの扱いに長けているとは思えなかった。そもそも、今襲ってきている二人は、すでに致命傷を負っている。

唐突にウエルは理解した。この少年は、このときを狙っていたのだ。殺すしかなくなるその時を……。

「ぐあっ」

「がはっ」

国民の振ったナイフによって、2人は血を盛大に噴出して倒れた。今まで一言も発する事のなかった声が、何故か断末魔だけは発した。国民はナイフを取り落とし、荒く息をした。中年男性に突き刺さ

ったカタナをすぐさま抜こうとしないあたり、そうとう精神的に疲れたのだろう。当然といえば当然だが。

ふと、苦しそうに国民の顔が、歪んだ。痛みに耐えるような、表情だった。そして、そのまま中年男性と共に倒れる。

国民の心臓には、先ほどのナイフが刺さっていた。中年男性はすでに事切れているはずだが、死体でもこの少年は操れるのだろうか？

「さてと、これで終わりかな？」

少年は、この異様な雰囲気を感じることなく、明るい声で締めくくった。そして、おもむろにウェルの方を向く。

「で？」

「は？」

「いや、指輪とらないの？」

「あ、ああ」

言われて初めて気づく。場の雰囲気に飲まれて、肝心な事を忘れていた。国民の指輪なら、手に入れて損は無い。

「縛られし国民よ、今、自由へ還れ」

唱えると、3人分の指輪が宙に浮いた。招くように手首を動かせば、指輪は素直に手中に収まった。

「へえ。民族によって謡うたって違うんだ」

「……」

少年は明るい声でそう言う。ウェルを見る顔は、無邪気だった。殺した事を省みないこのゲームの中で、しかし無邪気に笑える人

間が何人いるだろう。

「さあて、新手が来ないうちに逃げよっか」

この世界で無邪気に笑えるという『異常』を持つ少年。
それをウエルは、恐ろしいと感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0878b/>

Cruel Game

2010年10月28日06時02分発行